カミ新聞

令和２年１月27日

紙すき体験が行われるパピルス館の体験室（撮影：ルイス）

令和時代を迎えた和紙：越前和紙

日本政府は2019年4月1日午前、平成に代わる新元号を「令和」と決定した。「れいわ」と読む。菅義偉官房長官が記者会見し、墨書を掲げて公表した。令和と書いてあった紙は福井県の越前和紙の奉書紙だった。

越前和紙とはいったい何だろうか。なぜ越前和紙を新元号が書かれた紙として選んだのだろうか。この記事は越前和紙を選んだ理由を紹介する。

越前和紙とは

越前和紙とは、福井県、越前市今立地区「旧今立町」で製造される和紙である。品質、種類、量ともに全国一位の和紙産地として生産が続けられている。越前奉書と越前鳥の子紙が国の重要無形文化財に指定されている。

越前和紙の作り方

卯立の工芸館の方が説明によれば、越前和紙の製造方法は昔からずっと変わらなかった。まずは、原料を釜の中で煮込み、沸騰させ、余分なものを溶かす。次は、できた皮を洗い、皮に混ざる小さなちりを手で取り除く。そして、皮を木づちで叩くことで、あとで破れにくい丈夫な紙ができる。叩いた皮をすけたという流し台ですくい上げ、水分を含んだままのいくつかの紙を重ねて置き、機会を使用して圧力をかけて水分をしぼりとる。あとは乾燥させるだけだ。

越前和紙の優れたところ

今でも手作業からなるこの六つの工程を経てからこそ大量生産の用紙とだいぶ異なる独特の風合いや気品があり、風通しが良くて引き伸ばすことができ、軽くて丈夫な越前和紙ができる。

歴史的と経済的の眼差し

越前和紙の歴史は約1500年前に始まった。越前和紙の歴史は長いだけでなく、文化的にとても重要な役割を担っている。日本の歴史を通して公式用紙として使われ、全国に広まっていった。歴史的な役割を超え、地域の経済の支えにもなっている。日本は今人口減少という問題に向かい、田舎で暮らしている人たちの大半がお年寄りである。労働者の数は縮小し、地域経済が不足になってしまう。地域経済を復活させるため、伝統的な産業がその地の収入を上げる方法の一つになる。例えば、福井県では越前和紙は伝統的な産業の一つである。それを観光として利用し、人々に見てもらうように宣伝すれば、地域の経済的な力を果たすことができるのではないか。

パピルス館の紙すき体験

私たちも自分で越前和紙の魅力と特徴を感じるために、パピルス館で紙すき体験をすることにした。

パピルス館の受付で入場料を払い、体験(25 分)が始まった。体験室にある流し台に白色の水が入っていた。水に手を入れるとすぐ汚れる気がしたが、まったく汚れなかった。そして、その水を特別な器に注ぎ、少し前後に器を動かしたりして余分な水をしぼりとった。その後、飾り花をつけ、好きな色を塗り、乾燥させ、自分だけの越前和紙が綺麗にでき上がった。

越前和紙の作成中

完成した紙

10分ほど乾燥させたら、あなただけの越前和紙ができる。この間、パピルス館内のお店で和紙や福井県のお土産を買うのがオススメ。(撮影:アナ)

パピルス館とは

越前市にある越前和紙の里のパピルス館では、ネリなどの自然な原料を使って和紙を作る体験が楽める施設である。和紙作りの体験にはしおりや、ハガキ、うちわなどいくつか種類があり、体験によって料金が違う。詳しい情報は、http://www.echizenwashi.jp/features/papyrus.html にて。

体験者の感想

体験したばかりのオウさん(福井大学の留学生)は、「私たちが普段見ている越前和紙はすでに完成品だと思った。今回の体験で原料を触る機会があって、越前和紙の優れた品質が感じられた。とても綺麗で軽い紙だった」と話していた。

なぜ選んだのか

前に述べたように、越前和紙は昔から日本の歴史に重要な役割を果たしている。一方で、日本の伝統的な産業の一つとして、地域経済の支えにもなっている。また、大量生産の紙と比べ、越前和紙は質が高い。それにもかかわらず、越前和紙について日本人でも知らない。実際私たちもパピルス館に行く前は、越前和紙について何も知らなかった。しかし、和紙を作って初めて、その魅力を感じることができた。パピルス館が紙すき体験を通して、日本人にも外国人にも日本の伝統文化を伝えているという考えを持って、政府は越前和紙を選んだのだろう。

筆者の名前：アナ、ルイス、オウ